

山口県立大学 郷土文学資料センターだより

やまぐち文学回廊構想推進協議会の「調査・研究」事業

中原 豊 (中原中也記念館・館長)

やまぐち文学回廊構想推進協議会という組織がある。山口県ゆかりの近代文学者の顕彰や「やまぐちの文学」の県内外への情報発信を通じた、魅力ある地域文化の創造への貢献を目的として1997(平成9)年6月に設置された。現在は公益財団法人山口きらめき財団の事業の一環として運営され、事務局は山口県観光スポーツ文化部文化振興課に置かれている。

同会を構成しているのは、県内各市(下関市、山口市、萩市、防府市、岩国市、長門市、柳井市、周南市)、事業母体である山口きらめき財団他の組織(山口県教育会、山口県観光連盟)、県内の文学関連施設(山口県立大学郷土文学資料センター、山口県立山口図書館、金子みすゞ記念館、山頭火ふるさと館、下関市立近代先人顕彰館、中原中也記念館)、県内の文学団体(山口県詩人懇話会、青木健作顕彰の会、磯多を読む会、井上剣花坊顕彰会、宇野千代顕彰会、金子みすゞ顕彰会、兼崎地橙孫顕彰会、嘉村磯多生家の会、山頭火ふるさと会、林芙美子メモリアルの会、まど・みちお研究会)である(2020(令和2)年4月現在)。

具体的な事業内容としては、県内各地に点在する文学者ゆかりの地を線で結ぶ文学回廊ルートを策定するとともに、文学フォーラム、「やまぐちの文学おでかけ講座」(出前講座)や「文学散歩」などを実施する一方で、『やまぐちの文学を辿る道』や山口県ゆかりの近代文学者を取り上げた『やまぐちの文学者たち』を段階的に刊行し、のべ100名の文学者の略年譜や主要な業績を紹介してきた。こうして県民が山口ゆかりの文学者に親しむ機会を創設する活動を行ってきている。

昨年度から新規事業として「調査・研究」が始まった。これまで文学者を中心としていた活動の主眼を文学資料に移し、県内にある貴重な文学資料の所在確認・詳細な目録作成・デジタルアーカイブ化などを通じて、散逸を防いでよりよい環境で後世に伝えていくと同時に、その新たな価値や魅力を見出して広く発信していくことを目的としている。昨年度は下関市立中央図書館所蔵の雑誌『燭台』が対象となった。

私自身は中原中也記念館の館長(2008(平成20)年まで副館長)として同会に関わってきたが、昨年度からは会長に就任し、山口県立大学の加藤禎行准教授、山口県立山口図書館の井関和彦主査とともにワーキンググループの一員として『燭台』の調査にあたった。年度末にはささやかな報告会を開く予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて中止を余儀なくされた。



文学散歩(中原中也記念館にて、平成30年)

予算の減少のために事業が縮小の方向に進むのは避けられないが、広く山口県全域を視野に入れて、過去の文学者の足跡から現在行われている文学活動までを見通すことのできる「文学回廊」という視座は、後世に文学資料や活動の記録を伝えていく上で大きな意義をもっている。初代会長として永く同会を支えた福田百合子先生や、顧問として助力を惜しまなかった和田健先生が抱かれていた県立文学館創設という大きな目標を忘れることなく、あるべき姿を模索しながら粘り強く事業を継続していくことが肝要だと考えている。

(画像は「やまぐち文学回廊だより」第1号・第3号より)



おでかけ講座(高森高等学校にて、平成27年)



吉田常夏と雑誌『燭台』

加藤 禎 行 (郷土文学資料センター研究員)



吉田常夏肖像写真

雑誌『燭台』の発行者であった吉田常夏(1889〈明治22〉年～1938〈昭和13〉年)は、大正・昭和初期の詩人・編集者である。小説集『三都情話』(1918〈大正7〉年5月、三陽堂書店)、青柳有美と河井醉茗の他序をそなえた恋愛警句集『朱唇秘抄』(1918〈大正7〉年10月、三陽堂書店)などの著作を残してはいるが、日本近代文学館編『日本近代文学大事典』(講談社)に吉田常夏の立項は見られない。

常夏は、1889〈明治22〉年4月25日、東京市で産声を上げるも山口湯田の吉田家の養子となり、やがて下宇野令尋常高等小学校、山口中学校に学ぶ。やがて文学熱が高まり、常夏は雑誌『文庫』に新体詩の投書を始めている。1905〈明治38〉年16歳のとき、家族とともに東京に転居するが、以後の経緯については、常夏の妻吉田静代の回想録『ひとつの流れ』(1977〈昭和52〉年9月、光風社書店)が事情を伝えている。常夏は早稲田大学の高等師範部に一時、籍を置くも学業は続かず、『文庫』記者として詩欄を担当していた詩人河井醉茗の書生となり詩を志す。だが1909〈明治42〉年、出版準備中だった第一詩集の原稿と校正刷を火災で焼失し、詩作への意欲を喪失した常夏は、一度、詩人としての活動をやめてしまう。

以後、神戸大阪を転々としたのち、再び河井醉茗を頼り上京し、常夏は娯楽雑誌『うきよ』(大正2〈1913〉年3月創刊、楽文社)の編集に携わる。楽文社は、河井醉茗が編集していた『女子文壇』の発行元女子文壇社が別に立てた堂号で、吉田常夏は『うきよ』記者時代に、『女子文壇』記者の松井静代と出会い結婚する。しかし大正3〈1914〉年1月には楽文社を離れ、『読売新聞』の記者、三陽堂書店が出版した読み物の著述など、職を転々とし、大正7〈1918〉年に『中外商業新報』(日本経済新聞の前身)記者となり、大正12〈1923〉年まで勤めた。この年9月の関東大震災を経て、大正13〈1924〉年8月、吉田常夏は山口県に戻り『関門日日新聞』記者となる。吉田静代の回想録『ひとつの流れ』が伝えるのはこの時期までである。

以後の常夏の生涯を窺い知るための資料に、吉田静代述・吉田生緒記の『燭台・常夏・下関』(『燭台』第3号・第4号2002〈平成20〉年9月、2008〈平成26〉年6月、下関市で発行された同名異誌)がある。これは『ひとつの流れ』続編として口述筆記されたもので、下関時代の吉田常夏静代夫妻の生活と雑誌『燭台』の出版経緯を伝えている。

これに従えば、1927〈昭和2〉年4月、常夏は『関門日日新聞』記者として勤務中、社内で脳溢血のため倒れ療養生活に入り、その病床に集った地域の文学青年らと同年10月、『燭台』を創刊し、常夏は以後その編集に当たった。『燭台』は休刊や再刊を繰り返しながら1932〈昭和7〉年7月まで刊行が続けられる。その後1937〈昭和12〉年、常夏は妻静代と離別し、北九州小倉の愛人との生活に入り、1938〈昭和13〉年10月29日、小倉で永眠する。49歳であった。そして東京に戻った妻の吉田静代は、これらの回想録を書き残し、1992〈平成4〉年に101歳で亡くなっている。



昭和3年9月号 表紙藤永貞男

ところで雑誌『燭台』の誌面はどのようなものだったのか。現在、公

共図書館で『燭台』を所蔵するのは下関市立中央図書館のみで、現時点では26冊の刊行が確認できる。郷土文学資料センターでは、中原中也記念館・山口県立山口図書館と共同で、下関市立中央図書館の協力を得て、2019〈令和元〉年12月から2020〈令和2〉年3月にかけて現存する『燭台』の資料調査を行った。誌面の詳細は別の機会に報告するが、ここではその概略を述べる。

吉田常夏は『燭台』で、詩人として復活し数多くの詩作を発表することとなった。師にあたる河井醉茗は、常夏の詩への回帰を喜び繰り返し寄稿した。また編集者常夏は、中央文壇からの多くの寄稿者を獲得し誌面に賑わせている。表紙をプラトン社の図案家として知られた岩田専太郎や山名文夫に依頼して、同時代のモダニズム文化の雰囲気を与え、また、文藝春秋発行の雑誌『手帖』（1927〈昭和2〉年3月創刊）を模した「一ページ物原稿」欄も作られた。だが、その誌面構成は、『明星』『新聲』『文庫』などの明治30年代の詩歌を中心とした投書雑誌に近似しており、また各地に支部を設ける販路拡張や、投書家の交流を目的とした誌友会開催、「燭台清規」として投書家に示された投稿規定など、投書雑誌としての特徴が顕著に確認できる。『燭台』の大きな収穫としては玉井雅夫名義で執筆された九州若松の火野葦平の初期短篇を多く掲載したことが挙げられるが、宇佐川正明・兼崎地橙孫などこの時期のやまぐちの文学者の名も目次には見出せる。こうした名に混じりながら夭折する金子みすゞの童謡や、まだ十代だった和田健の初期詩篇も掲載されていった。

吉田常夏の尽力によって、近代的な港湾都市下関から送り出された地方詩歌雑誌の気風は、やがて山口県の奥まった盆地にも伝播し、山口市の詩人たちを触発し、詩歌雑誌『詩園』（1938〈昭和13〉年9月創刊）が出版される。『燭台』の精神は『詩園』へと継承されながら戦後における〈やまぐちの文学〉の素地を形成していった。『詩園』は戦時下の後継誌『防長文学』（1943〈昭和18〉年10月誌名変更）、『山口県文学』（1944〈昭和19〉年10月諸雑誌との統廃合）、戦後の後継誌『文藝風土』（1945〈昭和20〉年10月誌名変更）にまで連なっていく。

もちろん近代の山口県における地方文芸雑誌の起点を『燭台』のみに求めるべきではない。山口県近代文学年表作成委員会編『山口県近代文学年表』（1972〈昭和47〉年3月、山口県教育委員会）が伝えるように、明治期・大正

期の山口県で、地方文芸雑誌は肉筆回覧や活版印刷で刊行されていた痕跡が明瞭だ。ただそのほとんどが現在、確認・閲覧できず、今後もその現存確認の調査は継続されるべきだ。ともあれ吉田常夏が残した『燭台』は、〈やまぐちの文学者〉たちの歩みを考えるうえで、少なくとも昭和期の展開における起点となる重要な雑誌だった。



昭和4年1月号 表紙岩田専太郎



昭和5年11月号 表紙山名文夫

山口県立大学 郷土文学資料センターだより

やまぐち文学回廊構想推進協議会の「調査・研究」事業

中原 豊 (中原中也記念館・館長)

やまぐち文学回廊構想推進協議会という組織がある。山口県ゆかりの近代文学者の顕彰や「やまぐちの文学」の県内外への情報発信を通じた、魅力ある地域文化の創造への貢献を目的として1997(平成9)年6月に設置された。現在は公益財団法人山口きらめき財団の事業の一環として運営され、事務局は山口県観光スポーツ文化部文化振興課に置かれている。

同会を構成しているのは、県内各市(下関市、山口市、萩市、防府市、岩国市、長門市、柳井市、周南市)、事業母体である山口きらめき財団他の組織(山口県教育会、山口県観光連盟)、県内の文学関連施設(山口県立大学郷土文学資料センター、山口県立山口図書館、金子みすゞ記念館、山頭火ふるさと館、下関市立近代先人顕彰館、中原中也記念館)、県内の文学団体(山口県詩人懇話会、青木健作顕彰の会、磯多を読む会、井上剣花坊顕彰会、宇野千代顕彰会、金子みすゞ顕彰会、兼崎地橙孫顕彰会、嘉村磯多生家の会、山頭火ふるさと会、林芙美子メモリアルの会、まど・みちお研究会)である(2020(令和2)年4月現在)。

具体的な事業内容としては、県内各地に点在する文学者ゆかりの地を線で結ぶ文学回廊ルートを策定するとともに、文学フォーラム、「やまぐちの文学おでかけ講座」(出前講座)や「文学散歩」などを実施する一方で、『やまぐちの文学を辿る道』や山口県ゆかりの近代文学者を取り上げた『やまぐちの文学者たち』を段階的に刊行し、のべ100名の文学者の略年譜や主要な業績を紹介してきた。こうして県民が山口ゆかりの文学者に親しむ機会を創設する活動を行ってきている。

昨年度から新規事業として「調査・研究」が始まった。これまで文学者を中心としていた活動の主眼を文学資料に移し、県内にある貴重な文学資料の所在確認・詳細な目録作成・デジタルアーカイブ化などを通じて、散逸を防いでよりよい環境で後世に伝えていくと同時に、その新たな価値や魅力を見出して広く発信していくことを目的としている。昨年度は下関市立中央図書館所蔵の雑誌『燭台』が対象となった。

私自身は中原中也記念館の館長(2008(平成20)年まで副館長)として同会に関わってきたが、昨年度からは会長に就任し、山口県立大学の加藤禎行准教授、山口県立山口図書館の井関和彦主査とともにワーキンググループの一員として『燭台』の調査にあたった。年度末にはささやかな報告会を開く予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて中止を余儀なくされた。



文学散歩(中原中也記念館にて、平成30年)

予算の減少のために事業が縮小の方向に進むのは避けられないが、広く山口県全域を視野に入れて、過去の文学者の足跡から現在行われている文学活動までを見通すことのできる「文学回廊」という視座は、後世に文学資料や活動の記録を伝えていく上で大きな意義をもっている。初代会長として永く同会を支えた福田百合子先生や、顧問として助力を惜しまなかった和田健先生が抱かれていた県立文学館創設という大きな目標を忘れることなく、あるべき姿を模索しながら粘り強く事業を継続していくことが肝要だと考えている。

(画像は「やまぐち文学回廊だより」第1号・第3号より)



おでかけ講座(高森高等学校にて、平成27年)



吉田常夏と雑誌『燭台』

加藤 禎 行 (郷土文学資料センター研究員)



吉田常夏肖像写真

雑誌『燭台』の発行者であった吉田常夏(1889〈明治22〉年～1938〈昭和13〉年)は、大正・昭和初期の詩人・編集者である。小説集『三都情話』(1918〈大正7〉年5月、三陽堂書店)、青柳有美と河井醉茗の他序をそなえた恋愛警句集『朱唇秘抄』(1918〈大正7〉年10月、三陽堂書店)などの著作を残してはいるが、日本近代文学館編『日本近代文学大事典』(講談社)に吉田常夏の立項は見られない。

常夏は、1889〈明治22〉年4月25日、東京市で産声を上げるも山口湯田の吉田家の養子となり、やがて下宇野令尋常高等小学校、山口中学校に学ぶ。やがて文学熱が高まり、常夏は雑誌『文庫』に新体詩の投書を始めている。1905〈明治38〉年16歳のとき、家族とともに東京に転居するが、以後の経緯については、常夏の妻吉田静代の回想録『ひとつの流れ』(1977〈昭和52〉年9月、光風社書店)が事情を伝えている。常夏は早稲田大学の高等師範部に一時、籍を置くも学業は続かず、『文庫』記者として詩欄を担当していた詩人河井醉茗の書生となり詩を志す。だが1909〈明治42〉年、出版準備中だった第一詩集の原稿と校正刷を火災で焼失し、詩作への意欲を喪失した常夏は、一度、詩人としての活動をやめてしまう。

以後、神戸大阪を転々としたのち、再び河井醉茗を頼り上京し、常夏は娯楽雑誌『うきよ』(大正2〈1913〉年3月創刊、楽文社)の編集に携わる。楽文社は、河井醉茗が編集していた『女子文壇』の発行元女子文壇社が別に立てた堂号で、吉田常夏は『うきよ』記者時代に、『女子文壇』記者の松井静代と出会い結婚する。しかし大正3〈1914〉年1月には楽文社を離れ、『読売新聞』の記者、三陽堂書店が出版した読み物の著述など、職を転々とし、大正7〈1918〉年に『中外商業新報』(日本経済新聞の前身)記者となり、大正12〈1923〉年まで勤めた。この年9月の関東大震災を経て、大正13〈1924〉年8月、吉田常夏は山口県に戻り『関門日日新聞』記者となる。吉田静代の回想録『ひとつの流れ』が伝えるのはこの時期までである。

以後の常夏の生涯を窺い知るための資料に、吉田静代述・吉田生緒記の『燭台・常夏・下関』(『燭台』第3号・第4号2002〈平成20〉年9月、2008〈平成26〉年6月、下関市で発行された同名異誌)がある。これは『ひとつの流れ』続編として口述筆記されたもので、下関時代の吉田常夏静代夫妻の生活と雑誌『燭台』の出版経緯を伝えている。

これに従えば、1927〈昭和2〉年4月、常夏は『関門日日新聞』記者として勤務中、社内で脳溢血のため倒れ療養生活に入り、その病床に集った地域の文学青年らと同年10月、『燭台』を創刊し、常夏は以後その編集に当たった。『燭台』は休刊や再刊を繰り返しながら1932〈昭和7〉年7月まで刊行が続けられる。その後1937〈昭和12〉年、常夏は妻静代と離別し、北九州小倉の愛人との生活に入り、1938〈昭和13〉年10月29日、小倉で永眠する。49歳であった。そして東京に戻った妻の吉田静代は、これらの回想録を書き残し、1992〈平成4〉年に101歳で亡くなっている。



昭和3年9月号 表紙藤永貞男

ところで雑誌『燭台』の誌面はどのようなものだったのか。現在、公

共図書館で『燭台』を所蔵するのは下関市立中央図書館のみで、現時点では26冊の刊行が確認できる。郷土文学資料センターでは、中原中也記念館・山口県立山口図書館と共同で、下関市立中央図書館の協力を得て、2019〈令和元〉年12月から2020〈令和2〉年3月にかけて現存する『燭台』の資料調査を行った。誌面の詳細は別の機会に報告するが、ここではその概略を述べる。

吉田常夏は『燭台』で、詩人として復活し数多くの詩作を発表することとなった。師にあたる河井醉茗は、常夏の詩への回帰を喜び繰り返し寄稿した。また編集者常夏は、中央文壇からの多くの寄稿者を獲得し誌面に賑わせている。表紙をプラトン社の図案家として知られた岩田専太郎や山名文夫に依頼して、同時代のモダニズム文化の雰囲気を与え、また、文藝春秋発行の雑誌『手帖』（1927〈昭和2〉年3月創刊）を模した「一ページ物原稿」欄も作られた。だが、その誌面構成は、『明星』『新聲』『文庫』などの明治30年代の詩歌を中心とした投書雑誌に近似しており、また各地に支部を設ける販路拡張や、投書家の交流を目的とした誌友会開催、「燭台清規」として投書家に示された投稿規定など、投書雑誌としての特徴が顕著に確認できる。『燭台』の大きな収穫としては玉井雅夫名義で執筆された九州若松の火野葦平の初期短篇を多く掲載したことが挙げられるが、宇佐川正明・兼崎地橙孫などこの時期のやまぐちの文学者の名も目次には見出せる。こうした名に混じりながら夭折する金子みすゞの童謡や、まだ十代だった和田健の初期詩篇も掲載されていった。

吉田常夏の尽力によって、近代的な港湾都市下関から送り出された地方詩歌雑誌の気風は、やがて山口県の奥まった盆地にも伝播し、山口市の詩人たちを触発し、詩歌雑誌『詩園』（1938〈昭和13〉年9月創刊）が出版される。『燭台』の精神は『詩園』へと継承されながら戦後における〈やまぐちの文学〉の素地を形成していった。『詩園』は戦時下の後継誌『防長文学』（1943〈昭和18〉年10月誌名変更）、『山口県文学』（1944〈昭和19〉年10月諸雑誌との統廃合）、戦後の後継誌『文藝風土』（1945〈昭和20〉年10月誌名変更）にまで連なっていく。

もちろん近代の山口県における地方文芸雑誌の起点を『燭台』のみに求めるべきではない。山口県近代文学年表作成委員会編『山口県近代文学年表』（1972〈昭和47〉年3月、山口県教育委員会）が伝えるように、明治期・大正

期の山口県で、地方文芸雑誌は肉筆回覧や活版印刷で刊行されていた痕跡が明瞭だ。ただそのほとんどが現在、確認・閲覧できず、今後もその現存確認の調査は継続されるべきだ。ともあれ吉田常夏が残した『燭台』は、〈やまぐちの文学者〉たちの歩みを考えるうえで、少なくとも昭和期の展開における起点となる重要な雑誌だった。



昭和4年1月号 表紙岩田専太郎



昭和5年11月号 表紙山名文夫



『燭台』につどった詩人たち

中原 豊 (中原中也記念館・館長)

〈病あらば／詩に生くべし／家なくば／詩に住むべし
／／恋を失はば／詩に求むべし／禍来らば／詩に慰む
べし／／心淋しき時は／詩を祭るべし／朝に夕に／詩
を歌ふべし〉

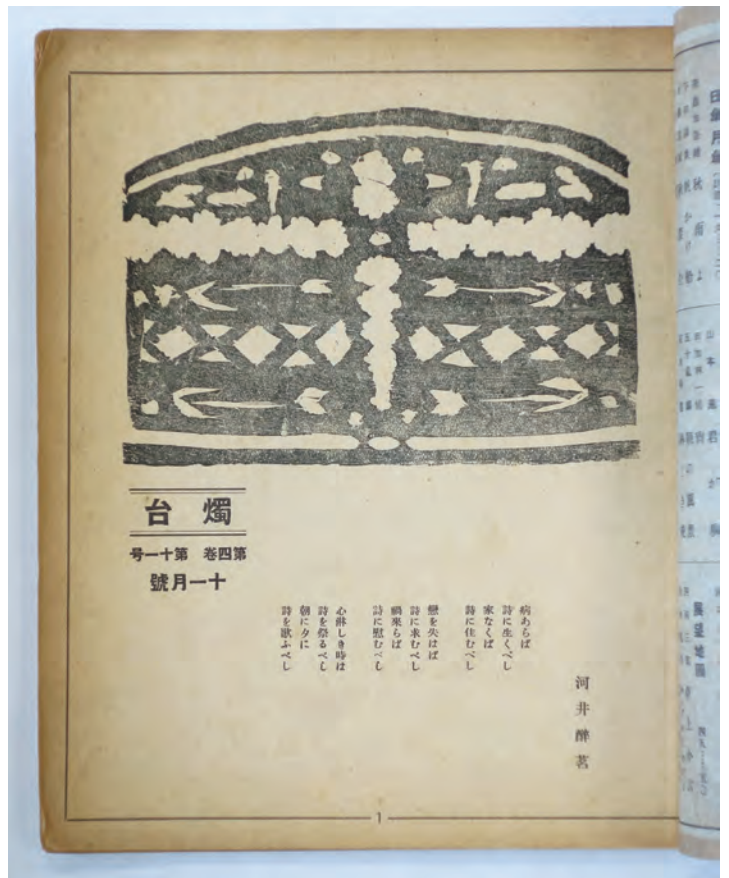
『燭台』の扉に繰り返し掲載された詩である。作者は
投書雑誌『文庫』を通じて多くの後進を育てた詩人・河
井醉茗。『燭台』創刊に際して敬愛する師から贈られた
この一篇に、常夏は「詩の道」あるいは「燭台詩経」と
いう題をつけて寄稿者や読者と共有しようとした。こ
のことは常夏の文学観や『燭台』の詩歌雑誌としての
特質をよく表しているといえるだろう。

常夏自身も『燭台』を舞台として旺盛な創作活動を
展開しているが、寄稿者の中でも詩人に注目してみ
ると、大きく二つのグループに分けることができる。

一つは常夏の依頼を受けたと思われる中央の詩壇
で活躍していた詩人たちで、河井醉茗、伊良子清白、
加藤介春、生田春月、服部嘉香などの名前を挙げる
ことができる。醉茗や清白は『文庫』を代表する詩人で、
若き日の常夏が仰ぎ見た存在であったろう。師弟関係
にあった醉茗の寄稿が多く、寡作の清白は一篇を数え
るのみである。介春、春月、嘉香らは常夏と世代が近く、
口語自由詩が盛んになる明治末から大正にかけて活躍
した詩人たちで、中でも郷里福岡に戻って福岡日日新聞の記者をしていた介春が、創刊号から最も多くの作品を寄稿して
いる。その他、北原白秋、西条八十、稲垣足穂、サトウ・ハチローなど、高名な、あるいは人気ある詩人の作品や消息を
掲載し、初期は著名な詩人や歌人の色紙・短冊を後表紙に写真版で印刷しているあたり、常夏の編集者としての経営戦
略がうかがえる。

もう一つのグループは、山口県あるいは九州在住で、後に評価されたり活動を広げたりしていった若き投書家たちである。
金子みすゞの名前は現代人なら見逃すことのないところだが、「軟扇子」というコラムでその死を悼み、弟の上山雅輔
が紹介文執筆の機会を与えられているところに、当時、下関の地でも一定の評価が与えられていたことがわかって貴重
である。同じ下関市在住で後に『二十世紀』『新領土』といったモダニズム系の雑誌で活躍する今田久や、山口市在住で『詩園』
『防長文学』などを創刊していく和田健らも『燭台』から羽ばたいていった詩人たちである。その他、詩人でもあった火野
葦平(当時の筆名は玉井雅夫)、第二期『九州文学』の創刊メンバーとなる原田種夫、大分の詩人・童話作家の阿南哲朗(下
関市立中央図書館の『燭台』の大半は阿南の寄贈である)、長崎で『河』を創刊する上村肇などの初期作品を見いだすこ
ができる。

こうして見ると、雑誌『燭台』は、明治期から活躍していた中央の詩人たちと、その作品を読み自らも詩人を志した地方
の若者たちが共有することのできる貴重な場であったと同時に、常夏自身にとっては、かつて挫折してしまった「詩の道」
をたどり直す舞台であったように思える。



『燭台』第4巻第11号扉



『燭台』につどった詩人たち

中原 豊 (中原中也記念館・館長)

〈病あらば／詩に生くべし／家なくば／詩に住むべし
／／恋を失はば／詩に求むべし／禍来らば／詩に慰む
べし／／心淋しき時は／詩を祭るべし／朝に夕に／詩
を歌ふべし〉

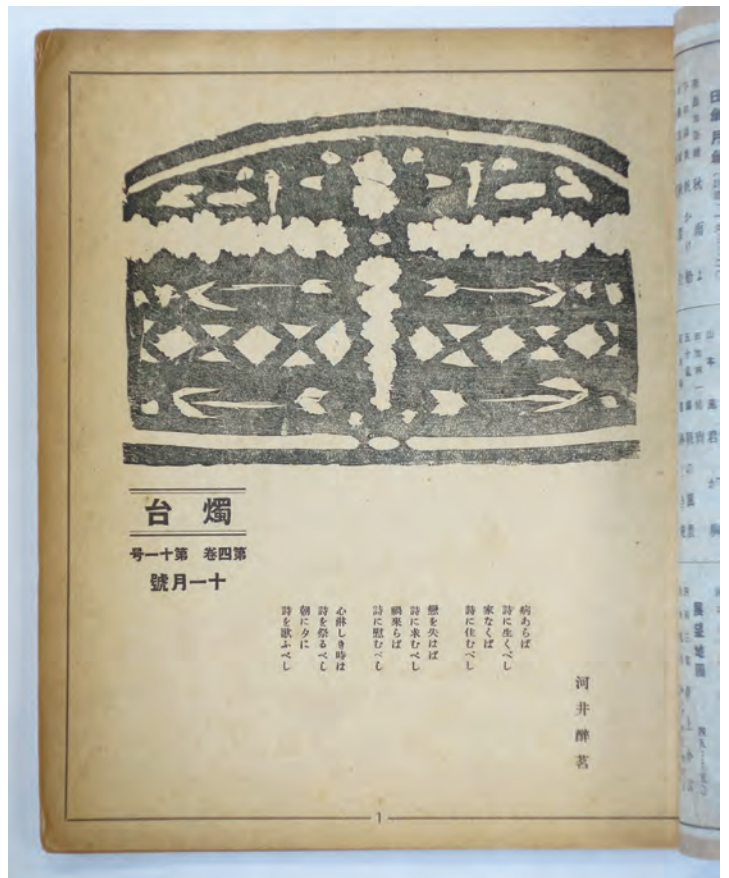
『燭台』の扉に繰り返し掲載された詩である。作者は
投書雑誌『文庫』を通じて多くの後進を育てた詩人・河
井醉茗。『燭台』創刊に際して敬愛する師から贈られた
この一篇に、常夏は「詩の道」あるいは「燭台詩経」と
いう題をつけて寄稿者や読者と共有しようとした。こ
のことは常夏の文学観や『燭台』の詩歌雑誌としての
特質をよく表しているといえるだろう。

常夏自身も『燭台』を舞台として旺盛な創作活動を
展開しているが、寄稿者の中でも詩人に注目してみ
ると、大きく二つのグループに分けることができる。

一つは常夏の依頼を受けたと思われる中央の詩壇
で活躍していた詩人たちで、河井醉茗、伊良子清白、
加藤介春、生田春月、服部嘉香などの名前を挙げる
ことができる。醉茗や清白は『文庫』を代表する詩人で、
若き日の常夏が仰ぎ見た存在であったろう。師弟関係
にあった醉茗の寄稿が多く、寡作の清白は一篇を数え
るのみである。介春、春月、嘉香らは常夏と世代が近く、
口語自由詩が盛んになる明治末から大正にかけて活躍
した詩人たちで、中でも郷里福岡に戻って福岡日日新聞の記者をしていた介春が、創刊号から最も多くの作品を寄稿して
いる。その他、北原白秋、西条八十、稲垣足穂、サトウ・ハチローなど、高名な、あるいは人気ある詩人の作品や消息を
掲載し、初期は著名な詩人や歌人の色紙・短冊を後表紙に写真版で印刷しているあたり、常夏の編集者としての経営戦
略がうかがえる。

もう一つのグループは、山口県あるいは九州在住で、後に評価されたり活動を広げたりしていった若き投書家たちである。
金子みすゞの名前は現代人なら見逃すことのないところだが、「軟扇子」というコラムでその死を悼み、弟の上山雅輔
が紹介文執筆の機会を与えられているところに、当時、下関の地でも一定の評価が与えられていたことがわかって貴重
である。同じ下関市在住で後に『二十世紀』『新領土』といったモダニズム系の雑誌で活躍する今田久や、山口市在住で『詩園』
『防長文学』などを創刊していく和田健らも『燭台』から羽ばたいていった詩人たちである。その他、詩人でもあった火野
葦平(当時の筆名は玉井雅夫)、第二期『九州文学』の創刊メンバーとなる原田種夫、大分の詩人・童話作家の阿南哲朗(下
関市立中央図書館の『燭台』の大半は阿南の寄贈である)、長崎で『河』を創刊する上村肇などの初期作品を見いだすこ
ができる。

こうして見ると、雑誌『燭台』は、明治期から活躍していた中央の詩人たちと、その作品を読み自らも詩人を志した地方
の若者たちが共有することのできる貴重な場であったと同時に、常夏自身にとっては、かつて挫折してしまった「詩の道」
をたどり直す舞台であったように思える。



『燭台』第4巻第11号扉



近代郷土文芸誌の保存と利用促進

井 関 和 彦 (山口県立山口図書館 主査)

地域の文学者たちが発行した、いわゆる郷土文芸誌は、作品を読むことはもちろん、その地域・時代の文芸事情も知ることができる、貴重な資料です。ここでは、公立図書館を中心に、近代の郷土文芸誌の保存と利活用の課題について、特にデジタル化の観点から考えてみたいと思います。

一つ目の課題は、郷土文芸誌の見つけやすさです。図書館によっては、未整理であるなどの理由で、郷土文芸誌が蔵書として登録されていないことがあります。また、誌名変更、欠号といった雑誌特有の事情もあり、求めるものがその図書館にあるかどうか、実際に行ってみないとわからないこともあります。各図書館が、その所蔵する郷土文芸誌を、きちんと整理・公開し、ウェブを介した蔵書の横断検索などを通じて、簡単に探せるようにする必要があります。

二つ目の課題は、郷土文芸誌を読む環境の整備です。近代の郷土文芸誌は、紙やとじ具の劣化などにより傷んだものが多く、それらには保存のための処置が必須です。もし、雑誌をデジタル化したならば、貴重な現物を保存しつつ、その中身を効果的に利用できるようになります。

昨今、デジタル化のコストは下がっているものの、すぐさま取り組むには、予算的に厳しい図書館が多いものと思います。また、デジタル化にあたって大きな問題となるのは、権利処理です。掲載作品の一つ一つが著作物であり、著作権法で保護されています。作者(または作品の権利を持つ著作権者)に無断でデジタル化することは、著作権の侵害にあたります。デジタル化のためには、著作者の没年を調べて保護期間内かどうか調べたり、著作権者の所在を探して許諾を得たりする必要がありますが、多くの作品が載る郷土文芸誌の著作権調査には、莫大な時間と労力がかかり、中には、権利の所在が判明しない孤児作品(オーファンワークス)も少なくないと思われます。

実は、著作権法の規定により、図書館は、著作権の存続するものであっても、「保存のため」に資料をデジタル化(複製)することができます¹。ただし、それをウェブ上に公開するなど、館の外で利用できるようにするには、権利処理が必要です。その際、文化庁長官の裁定を受け、補償金を供託することで利用可能とする「著作権者不明等の場合の裁定制度」²を活用することは検討すべきでしょう。また、提供システムには、外部のデジタルアーカイブを活用³することも考えられます。

予算や人員の不足など、根本的な課題もありますが、公立図書館には、様々な制度やサービスを活用しながら、市民の財産である近代の郷土文芸雑誌をより読みやすく、見つけやすくする努力が、いま求められています。

この小文は、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 ライセンス (CC-BY) で公表します。



国立国会図書館デジタルコレクション (国立国会図書館)

¹ 著作権法第31条第1項第2号

² 著作権者不明等の場合の裁定制度 (文化庁ウェブサイト)

https://www.bunka.go.jp/seisaku/chosakuken/seidokaisetsu/chosakukensha_fumei/

³ 例えば、国立国会図書館が運営するデジタルアーカイブ「国立国会図書館デジタルコレクション」でも、外部機関のデジタル化資料を公開しています。

<https://dl.ndl.go.jp/ja/intro.html#idx4-1-16>

寄贈図書 (2019年11月～2020年4月)

下関市観光スポーツ部文化振興課『拝啓 古川薫さん』、多田みちよ『見つかった磯多の習作—嘉村磯多ノートⅣ』

寄贈雑誌 (2019年11月～2020年4月)

『火山群』第57号(岩国文学協会)、『其桃』第899～904号(「其桃」発行所)、『19現代山口県詩選』第56号(山口県詩人懇話会)、『小宇宙』支部報第8号(コスモス短歌会山口県支部)、『すばる』第54号(すばる俳句会)、『中原中也記念館館報2020』第25号(中原中也記念館)、『颯』第112～113号(颯文学会)、『ふるさと通信 きずな』第10号(ふるさと紀行編集部)、『文芸山口』第348～350号(山口県文芸懇話会)、『山彦』第154～156号(山彦発行所)

編集後記

新型コロナウイルスの影響により、予定していた催しが軒並み中止・延期となっております。山口も例外ではなく、演劇や映画などをはじめ、講演会・展覧会も中止・延期を余儀なくされました。そうして中止となったもののなかに、2020年3月22日に開催予定だった調査・研究報告会「燭台再発見」があります(令和元年度受託研究「やまぐちの文学者たち」に係る調査・研究」の成果の一部)。すでに発表者と会場も定まり、ポスター・チラシを作成して案内を行い、あとは開催日を迎えるだけでした。中止は誠に残念でしたが、今号は、「燭台再発見」に登壇予定だった中原豊・中原中也記念館館長、井関和彦・山口県立山口図書館主査、加藤禎行・郷土文学資料センター研究員の各氏に、報告予定だった内容をご寄稿いただきました。文化・芸術は緊急時に後回しにされがちですが、ドイツのモニカ・グリュッタース文化相の「アーティストは必要不可欠であるだけでなく、生命維持に必要なのだ」との言葉の重みをかみしめて、いまできることを行ってきたいと思います。

(菱岡憲司)

燭台
Rediscover the SYOKUDAI
再発見
令和元年度 やまぐち文学回廊構想推進協議会
—— 調査・研究報告会 ——

下関市で吉田常夏が発行していた文芸雑誌「燭台」。
昭和モダンにおける、やまぐちの文学の姿を現在につたえています。
下関市立図書館に残る貴重資料「燭台」の調査を通じて
その紙面から見出されるものの価値を探っていきます。

2020年3月22日(日) 13:00-15:30
山口県立山口図書館 第一研修室
★入場無料・予約不要★

報告
中原 豊(中原中也記念館館長)「『燭台』につどいた詩人たち」
加藤 禎行(山口県立大学郷土文学資料センター研究員)「吉田常夏と雑誌『燭台』」
井関 和彦(山口県立山口図書館主査)「近代の郷土文芸誌の保存と利用促進」

お問い合わせ 〒753-8502 山口市桜島3-2-1 山口県立大学 郷土文学資料センター
Mail: katoy@yamaguchi-pu.ac.jp Tel: やまぐち文学回廊構想推進協議会 (083)933-2627(西藤)
主催: やまぐち文学回廊構想推進協議会 山口県立大学郷土文学資料センター

燭台再発見ポスター(本学教員:小橋圭介作成)